

— 祖父母と孫とのかかわりから —

京都女大家政

菅辺美和子

目的 急速に進展しつつある高齢化現象の中で、心身ともに健康な高齢者がより積極的に健全な生活を営むことができる環境づくりが急がれる。とりわけ家庭における高齢者の役割或は位置づけのあり方が高齢者自身の生活の満足感ひいては生きかゝいをも左右するのではないかと考えられる。本報では祖父母-孫関係研究の一環として、祖父母の孫に対する感情やその実際的なかかわり方の特徴をとらえ、高齢者の家庭内での役割価値について家庭教育力という観点から考察したい。

方法 祖父母と孫とのかかわりの実態を知るための質問群と祖父母自身の生活全般にわたる実状を問う質問群から成る質問紙を作成、民間の老人文化施設(財団法人S老人センター)主催の公開「老後を考えるシンポジウム」に参加の60歳以上の高齢者(男72名・女125名)を対象に質問紙を配布し回答を依頼した。調査日は平成2年10月20日、有効回収率は71.5%であった。

結果 孫と同居の祖父母よりも別居の祖父母の方が、孫に対してより寛容な構えを示すかややもすれは過保護・溺愛的態度にはしりかちな特徴が認められた。同居の祖父母の中では毎日のかかわりを通じて孫への感情が時として無条件に可愛い存在と思える場合と、手のかかる面倒な存在と見える、いわば両極の感情に揺れている特徴が注目された。生活実状としては、同居者の方が別居者よりも現状に満足している者の比率は高かったものの、上記特徴もふまえて考えるならば、円滑な祖父母-孫関係の展開には開放的な両親の意識に依るところが大きいことが示唆された。